

## フィールドワークと質的研究の諸理論 —実態調査から課題解決型実践的研究へ—

渡邊安男 渡邊友明 岡田啓佑 高 宁 崎浜 聡

### Abstract

This article considered the necessity of “a qualitative study” as technique of fieldwork. There are a big difference between conventional fieldwork and a recent qualitative study in study intention. It was for conventional study intention to highlight the on-site problem based on the data which we collected in fieldwork.

On the other hand, in a qualitative study, it is made an on-site inherent problem study intention to participate in problem solving as a member of the person concerned. In brief, we strengthen fact concerned from an on-site spokesman to the person concerned, and a more practical study is demanded. We take it up about a theory of such a qualitative study by the main subject how old it is.

【キーワード】 パーソナル・ライフヒストリー、質的研究、物語論、エスノメソドロジー

### はじめに—研究の動機—

我々は各自の研究テーマに応じて、質的研究の修得を進めており、最近のフィールドワークの諸理論に関して敏感に反応していた。しかし、編著者（渡邊安男）の世代（60代）からこの状況を眺めると「なぜ現在、質的研究が注目されるのか」、「質とはいったいなんなのか」というような素朴な疑問が頭をよぎる。実際に編著者はこれまで、「量的調査法」を用いた社会教育調査を行ってきた。なぜなら、調査者の主観的な記述や被調査者の言説（聴き取り）よりも学問的な客観性は統計学的（数論理）な手法によって確保されると考えていたからである。逆に言えば「主観的なデータ」はどのようにすれば客観性を担保できるのだろうか、という妥当性の問題を容易に乗り越えることはできないという消去法的選択だったのかもしれない。

しかしながら、編著者のこれまでの調査研究の道程において量的調査よりも質的調査の必要性を実感させる現地調査に巡り合ったことを境に質的調査の手法にも着目するようになった。このような人生における出来事を語ることを質的研究では「ライフヒストリー」と呼ぶ。ここでは、編著者の調査研究の歴史の中から、量的調査から質的調査への転換の契機となった出来事について語ってみたいと思う。

編著者は、学部学生一年の時から調査にたずさわる機会が与えられ、宮城県伊具郡丸森町で「農

村と教育に関する調査研究」を行った。三年生の時には「仙台市民の意識調査」、四年生の時には、宮城県亘理郡山元町をフィールドとして「農民の生活意識の変容に関する調査研究—生活構造論的アプローチの一つの試み—」を行った。

大学院の修士課程では、「山形県天童市における農村の生活構造と生活意識に関する研究」を扱い、博士課程では、福岡県北九州市にまで赴き、様々な調査を行った。また、大学院の院生時代に岩手県下閉井郡岩泉町で「地域社会と教育」などの調査研究を5年間行った。

このように編著者は学部学生時代から「農村」を主なフィールドとして調査を行ってきた。農村での調査時には、しばらくたての牛乳やウニやホヤなどの海産物を共食すると「これでお前もわたらの仲間だ」と言って調査に快く協力してもらうことがあった。これは現在の専門用語で言えば「ラポール」（信頼関係）と言い換えることができよう。

博士課程を単位修得満期退学し、香川大学の助手として採用され、今日に至るまでには、「社会教育施設」、「子どもと教育」、「青少年非行」、「子どもと高齢者のふれあい」、「瀬戸大橋の橋脚の鳥々」等に関する調査を行ってきた。これらは、ほとんどがアンケート調査紙を用いた数量的な調査研究であった。

以上のような研究手法で行ってきた編著者にも転換の契機がやってくる。中野卓が日本社会学会で「質的研究法」に関する研究を口頭発表した時、会場は満員で大盛況だったが、編著者は会場で質的研究に関する書籍を購入したものの、これまで通りの数量的な研究を発表していた。

しかし、瀬戸大橋に関する数量的調査を学会で発表したところ、人口の少ない小さな島で統計学的な調査がどれほど意味を持ってくるのか、という鋭い質問を受けた。つまり、量的な調査の意義は、フィールドの実態把握が膨大で、調査者が見て廻ることができない場合に数という抽象的な記号に置き換えて理解するのに適しているのである。調査は、常に量的もしくは質的な研究が優れているわけではなく「何を明らかにするか」という研究意識によって決定されなければならないのである。

この学会での指摘は、編著者の研究手法に関する考え方に大きな衝撃を与えた（第一章第四項参照）。この出来事を契機として、編著者は量的調査から質的調査への転換を図り、質的調査によるフィールドワークの試みとして「瀬戸大橋の橋脚の島の人々の生活と教育と地域課題」（『香川大学教育学部研究報告第130号』）と「公民館からコミュニティセンターにかわってからの諸課題」（『香川大学教育学部研究報告第131号』）という2編の質的研究の論文を発表した。

ところで、量的調査から質的調査への転換という経験は、いったいどのような意義を持っているのだろうか。つまり、編著者は単に流行の学問に乗り換えただけなのか、それとも質的研究は量的研究よりも優れており量的研究よりも客観的妥当性を有しているからなのだろうか、といった質的研究に関する根本的な問いはどのように解決されるのだろうか。どのようにして上述した編著者の個人史が学問として扱われるのだろうか。少なくとも、このような問いは最初から質的研究を学んでいる学生達には希薄なように見える。なぜなら、現場（フィールド）の理解の仕方が理論的に「質」と「量」に分けて考えることができる、と言われても抽象的で実感として与えられないからである。

この視点から言えば、フィールドワークで重要なことは質的調査法を駆使した実態把握ではなく、現場にどのように入り込んでいくのか、といった調査者の「実践的意識」にあると考えられる。ただし、調査者が現場（フィールド）に闇雲に入り込めばよいものでもない。調査者は、現場の人々にとって、部外者であり、時として侵略者になりかねない存在なのである。調査者は、フィールドワーカーとしての訓練を積まなければ務まらないものである。しかし、その初歩的な試みは、フィールドワークの理論的支柱を学ぶことであろう。

したがって、本論文では、大学院生達が各自の研究活動や大学院の授業と研究会において学んだ質的研究に関する最近の理論の基礎的理解や研究成果についてまとめたものである。第一章では、

従来の民俗学の「聴き取り調査」と質的研究における「インタビュー調査」を比較して、両者の違いについて指摘し、次章以下の新たな質的研究法へと橋渡しの役目をしている。第二章は、質的調査法の主な手法である「参与観察」と「インタビュー」について説明し、調査者が量と質の違いを理解することによって二つの調査法に質的な視点からのアプローチが可能になってくることを指摘している。第三章では、インタビュー・データを物語論的に解釈する方法によって、話者が気づかなかった出来事の体験のもう一つの意味を語り直すことの意義（出来事の多面性）について提示する「ナラティブ研究」を紹介し、自身の研究である出来事に含まれる人間成長の語りの教育学的意義について提起している。第四章は、ガーフィンケルの提唱した「エスノメソドロジー」の基礎理論の一つと考えられる「現象学」について説明し、調査者が現場を意味の網の目として眺める視点を「現象学的還元」によって、確保する方途の重要性について指摘している。

(渡邊 安男)

## 第一章 パーソナル・ライフヒストリー研究

### 1. ライフヒストリーについて

現在のライフヒストリー研究では、ライフヒストリー（生活史）をはじめ、オーラルヒストリー（口述史）、ライフレビュー（人生回想）など様々な立場からのアプローチが行われている（本論第三章参照）。しかし、それぞれに共通する立場は「ライフ（生活）のヒストリー（歴史）を研究の対象とする」ことである。換言すれば、様々な生活を歴史的に考察することである。つまり、生活の様態と歴史的研究の手法によって、ライフヒストリー研究の立場も様々な角度からアプローチされるのである。しかしながら、このような「生活の歴史的研究」はどのような背景によって誕生したのであろうか。

生活に密着した研究のはじまりは周知の通り「文化人類学」の分野においてである。初期の文化人類学では、学者が直接現地に赴かず、現地から帰ってきた商人や宣教師、植民地統治の役人などの話をまとめる「間接的アプローチ」であった<sup>1)</sup>。しかし、このような間接知の限界が指摘されるようになり、1910年代に入るとB・マリノフスキーやラドグリフ＝ブラウンらが長期間にわたる現地調査をおこなうようになった。彼らは従来の進化主義や伝播主義を批判し、社会を有機体として捉え、個人がこの中でどのように連関しているかを調査の基準にする「機能主義」の立場をとった<sup>2)</sup>。ここから現代に繋がる文化人類学の系譜が始まったといえる。

現在の文化人類学の本質論として「異文化理解とは何か」という根源的な問いが突きつけられている。つまり、異文化を知るには、自国の文化を知らなければならないが、では自文化とは何か、という問いが新たに問われることになるのである。このような問いは、結局のところ我々は真理問題として異文化を理解することは不可能であるという論理に辿り着くことになる。しかしながら、絶対知としての異文化理解は不可能である、という結論は学問的真理性的の問題であって、フィールドワーカーである我々の関心事（問題意識）とは乖離している。要するに、自分とは異なった文化を知るという意識は、異文化を通じて普遍的な人類の理解に到達するという学問的視点ではなく、異文化という現実に直面した時にどのように振舞うべきか、という実際的な問題意識なのである。

学問の明証性に対する危機が19世紀末葉から顕著に出現してきた時に、我々は学問の厳密性を追及することよりも、我々にとって実用的な範疇でのみ有用な学問へとシフトチェンジしていく。いわゆるプラグマティズムである。このような思想の流れが文化人類学にも影響を及ぼしはじめる

と、学問的真理の追究よりも実際(生活)に有効的な理論や理解が求められるようになる。ここにおいて、ライフ(生活)に着目したヒストリー(歴史)的研究の必要性が生じてきたのである。

以上の考察で、ライフに研究の視点が移ってきたことはわかってきたが、なぜ、ヒストリー研究なのか、についての疑問は残る。従来の歴史的研究は、国家や民族、社会などのマクロな対象を公式記録や日記などの文献や証言、インタビューなどによってより「事実」に接近することが研究の手法であった。しかし、出来事を忠実に記録することが歴史になるという主張には矛盾があり、実際は時の権力者によって選択された記録のみが残されてきたのである。つまり、歴史は事実の総体なのではなく意図的に作られたものなのである。

一方、ライフのヒストリー研究は、個々人の生活の歴史の中からマクロ的な社会の問題を見出し、こうとするものである。つまり、社会の問題を個人の生活の中から浮かび上がらせることを目指す研究なのである。この個人の歴史をどのように考えるかは、本論の第三章「ライフストーリー研究」に詳しいので、ここでは詳述しないが、本章では従来の「フィールド研究」から新しい「質的研究」への必要性を実際のフィールド調査を踏まえて述べていきたいと思う。

## 2. パーソナル・ライフヒストリーとは

ライフストーリーを直訳すると「生活史」となるが、特にパーソナル(個人)の生活に着目する研究を「パーソナル・ライフヒストリー」研究と呼ぶことができる。これは学問的分野でもそれほど定着しているものでなく、解釈も様々である。

事例研究について中野卓は「大量調査の結果が出たのち、その結果に基づいて再び新たにパーパスに選ばれた幾つかのケースについて、集中的な、あるいは焦点をしばった面接によるケース・スタディ(事例調査)がなされることが望ましい」<sup>3)</sup>と述べている。ここでは、質的研究の基本が語られており、量的アプローチを受けて、質的な研究が行われることが事例研究として「望ましい」と言われている。

事例研究としてのパーソナル・ライフヒストリーは、このような視点から、個人の生活世界という次元をインフォーマント(聴取対象者)に語ってもらうことによって、より個別的な問題が明らかになり、マクロとミクロの両面的なアプローチの結果が出されることになる。さらに中野卓は「人間を知るための一手段として、それを類型としてとらえてみることも必要であるが、典型的把握だけが科学的なものではない」<sup>4)</sup>と述べているように、質量のどちらかが優れた調査法なのではなく、むしろ一面的な理解のほうが誤った理解の仕方であることを主張している。

ライフストーリーの定義を小平朱美は「個人の生涯の縦断面を、本人が現在の状況の中から回想した時に綴られる事象や感情の流れ」<sup>5)</sup>としている。ここでの要点は、個人の生涯の「縦断面」(個人史)であろう。個人の歴史が回想されるという事柄は、その時に生きた生活世界と密接に関わっており、その人の人生に環境が深く結びついた様相(事象や感情の流れ)を帯びている。個人史が第三者にとって重要な意味を持つものは、第三者が知らない時代や社会を直接生きた経験を語ることである。

一方、パーソナルが持つ意味とは、調査者と被調査者という人間関係を含んでいる。調査者は、自分の利害だけで被調査者に接触するならば「略奪的調査」<sup>6)</sup>と呼ぶことができるだろう。調査者と被調査者との関係性は、調査者の一方的な取調べる立場であってはならない(ラポール)。逆に、調査者が現場に参与し、現場の人間に感情移入してしまい彼らに都合の良い情報や主張だけを取捨選択することも許されない(オーバーラポール)。フィールドワークにおける調査者は、被調査者との関係を「遠うからず、近すぎない」ものでなければ事例研究の目的を果たせない場合が出ている。

もう一つのパーソナルの意義は、先で引用したようにケースを「集中的、焦点的」に絞り込むこ

とである。小平朱美は「老人」を1979年の夏に調査を開始する際「大正三（1914）年以前生まれの、六十五歳以上の人々」<sup>7)</sup>と規定した。このような規定は、ケースを焦点的に捉えるための手法の一つである。

以上のように、パーソナルという術語は、事例を囲い込み、研究対象を限定することによって、より個人的な語りをデータとして聴取し、一つの「モデル」として提示することが目指されるのである。

### 3. インタビューとヒアリング

フィールドワーク（事例研究）とは、調査者の問題意識によって研究対象となった現場に関する質的な調査を通じて現場の実態を把握し、現場で起こっている問題を社会的な課題として提示することである。

小平朱美は『老人福祉とライフストーリー』（1981年）の中で、「インフォーマント」（聴取対象者）の語りを「聴き取る」（ヒアリング）という手法を用いている<sup>8)</sup>。また、共著の中野卓も『離島トカラに生きた男』（第一部1981年、第二部1982年）においても同様に聴取り（ヒアリング）を行っている<sup>9)</sup>。

一方で、他者の話を聞くという学問的行為には「インタビュー」という術語も存在する<sup>10)</sup>。両者は「他者の話を聞く」という行為において共通しているように見えるが、一体どのような違いによって使い分けられているのだろうか。実は、この違いによって、従来のフィールドワークと現在の事例研究（質的調査）の違いが明らかになるのである。

ヒアリングの邦訳は「話しを聴き取る」という意味である。日本語の「聴く」は「真剣に身を入れて聞く」という限定したものを聞く姿勢を表している。要するに、聴き取りは、思い入れのある特別な事柄をつぶさに聞取ることである。

一方、インタビューは他者理解を目的とした調査法として開発されたもので、対象者から情報を聞き出す意図によって行われるものである。

しかし、インタビューとヒアリングは、調査を目的とした聞き取りという点では共通している。インタビューの手法は、質問表に基づいた一問一答形式のものからオープンアンサー（自由解答）などの非構造的な形式を含めると、他者の語りを聞取る手法として十分に機能すると思われる。ここで、あえてヒアリングという手法が強調される意味はどこにあるのだろうか。

上述した小平や中野のヒアリングとは、従来の民族調査の手法に基づいている。民族学の研究領域は、①有形文化⇒住居、衣服、食制、漁業・・・②言語芸術⇒童詞、命名、言葉、諺・・・③心意現象⇒妖怪、幽霊、占い、タブー、呪い・・・以上の三部門に分けられている<sup>11)</sup>。これらの分類は「分類民族語彙」としてカテゴリー化されており、これらのカテゴリーに基づいて、「聴き取り」（ヒアリング）が行われている。よって、社会調査におけるヒアリングもカテゴリー化された分類に従って、聴き取るという手法が用いられたのである。

したがって、事前調査によって、何かしらのカテゴリー化（コード化）がおこなわれていることを前提として現場の人々の語りを聞取る行為を「ヒアリング」と定義づけることができる。

このヒアリングという手法に対して昨今の質的研究の手法としてのインタビューは、上述したように、他者のどのような語りを引き出すかという研究者の意図によって、三つの形態をとっている（本論第二章参照）。本論の第四章では、他者の「語り」そのものに着目し、「ナラティブ研究」（物語研究）として深められることを紹介している。

以上の考察を踏まえると、ヒアリングは、研究者がキーワード化したカテゴリーの中で、話者が語ることが求められていることに対して、インタビューでは、他者の語りの人間存在論的視点から

語りの意義を見出そうとする「ナラティブ研究」のための語りの聴き取りということになる。

よって、ヒアリングとインタビューの違いは、前者が他者の語りが単なる概念の分類に関する情報採取から後者の語り自体の学問的アプローチへと進展したことにみられる。後者の考え方は、フィールドワークの方法にも大きな影響を与えた。

#### 4. まとめに一瀬戸大橋の橋脚の島々の人々に関する質的考察一

本論文の編著者である渡邊安男は、『瀬戸大橋架橋に伴う地域社会の社会体系・生活体系・文化体系の変容に関する総合的研究』<sup>12)</sup>(昭和63年度教育研究特別経費による報告書、1989年)において、「瀬戸大橋架橋の島々の住民の生活意識」に関する量的な調査をおこなった。この時の調査対象者は与島・小与島が328人、岩黒島は99人、櫃石島が286人の総計713人であった。調査項目は①住みやすさ、②生活環境、③生活上の悩み、④瀬戸大橋の利用、⑤生活空間、⑥教育意識、⑦文化財の保護、⑧帰属意識、⑨島のイメージ、⑩地域社会の意識、⑪島の発展の方向、⑫島の振興と今後の希望、⑬属性(フェイス・シート)である。

調査の目的は、瀬戸大橋完成以前と以後の生活状況の変化を把握し、今後の課題や島の将来性について提言することであった。調査の印象としては、生活環境の変化によって、地域の自然破壊や社会の風紀の乱れ、騒音などが顕著に感じられるようであった。そして、島の方向性は、漁業が25.9%と一番多かったが、地元主体の観光業に対する期待は、55.7%と高いことがわかった。

この量的調査で、瀬戸大橋が開通して、人々の行き来が活発になり、産業として観光が盛んになったことがわかったが、その反面、島民の流失や観光客のマナーの悪さによる生活環境の乱れが住みにくさにつながっていることがわかった。

渡邊安男は、上記の量的調査から18年後の2007年5月～8月にかけて、今度は質的調査による瀬戸大橋の橋脚の島々の調査研究をおこなった<sup>13)</sup>。これは、上記の量的調査を学会で発表した際に、人口の少ない島々で、数量的調査の有効性がどれほど主張できるのか、という調査研究に対する根本的な指摘を受けての転換であった。そこで2007年度の調査で渡邊は、民俗学的調査の手法である「聴き取り」(ヒアリング)を用いた。特に、パーソナル・ライフストーリーのインフォーマントとして櫃石島の婦人会長さんや岩黒島出身の民宿の女将さんなどのライフストーリーを紹介した。彼女達の話には、生活者の目線から瀬戸大橋開通以後の橋脚の島々の生活状況の変化と今後の期待や島の厳しい実生活がいきいきと語られた。

調査者である渡邊安男は、何度も島を訪れ、島の人々との交流が深まるにつれて調査に対する人々の協力が積極的になっていったと話しており、一方的で、一回的なアンケート調査に比べ、調査者と被調査者との人間関係が親密になっていることがわかる。この質的調査では、前回の調査で期待された観光業は一時期を除いてあまり繁盛しなかったことがわかった。また、騒音も慣れてしまい今ではあまり問題にしていけないという。しかし、深刻なのは、過疎化であり、与島の学校閉鎖が象徴するように子育てをする若い世代が島を離れていくことに歯止めがかからない状況にあることがわかった。さらには、法律上「僻地」の規定があてはまる櫃石島では、距離的に香川県坂出市に遠いが、岡山に近いので生活の基盤を岡山市と倉敷市に置いている。実際に現地を訪れてみると、最新の水洗トイレが設置されていたり、民宿があったり実際様子は法概念上の僻地に当てはまらないことが多く見られた。

以上の質的考察において感じたことは、量的調査では、全体的な傾向が把握されるが、具体的で個別的な実態についてはほとんど捉えられていない。一方、ヒアリングを用いた質的調査では、何度も現地に出かけるという時間的、予算的な消耗があるが、現地の人々との親密な関係において語られる具体的で個別的な語りは生活に即した調査を目指す際には有効に働くという印象を得た。

しかし、ヒアリングという調査法は、民俗学に基礎を置くもので、最近の質的研究に比べると時代遅れの感もある。質的調査法としてのヒアリングやインタビュー、参与観察などフィールドワークの新たな方法論が提唱される今日の動向を踏まえて次章以降は、質的研究に関する諸理論を紹介していく。

(渡邊 友明)

## 第二章 質的調査法としての参与観察とインタビュー

### 1. フィールド研究の二つの手法

調査者の問題意識等によって研究対象（フィールド）が決定されてくるが、調査者が現場でどのような事柄をどのような方法によって、データ収集をするかは従来のフィールドワークの手法とは大きく異なってくる。しかし、質的研究や従来のフィールドワークに共通する主要な調査法は二つに大別することができる。一つは「(参与)観察」であり、もう一つは「インタビュー」である。

もちろん、昨今の質的研究と従来の文化人類学や社会調査でおこなわれてきたフィールドワークでは、両者の手法に大きな違いがみられる。例えば、文化人類学者が研究対象とする異文化の中で生活する場合、異文化理解のために自らも同じ場所で住民達と衣食住をともにし、祭りや行事に参入しても文化人類学者にとって異文化生活であることには変わりはない。しかし、異文化を理解するという立場は、前提として、自文化とはなにか、文化とはなにか、という問に答えていかなければならないのである。

これに対して質的研究の立場では、事実の検証や学問的真理性の追究という関心よりも現場で生起する問題を当事者の一員となって関わり、現場での自らの役割を果たすために、現場のデータ収集やデータ分析によって新たな視点の転換を提供し問題解決の手助けをする「実践的研究」（アクションリサーチ）が目指されるのである。

### 2. 質的調査者のデータ収集のまなざし—量と質—

人間の認識の仕方には「量」（数）と「質」（言葉）の二つがある。世界を数量的に理解する方法として人間は「数学」を発展させてきた。一方、言語（言葉）は我々の日常生活を営む上で欠かせないツールとして活用されている。

両者は、実在物の「抽象化」という意識作用の働きを源泉とすることでは同一であるが、抽象化作用の領域や道具が異なっている。まず、実在物は意識の「名辞化作用」によって、世界から分節され、ある物（者）として把握される。数量化は、このある物（者）を抽象化して「1」（数字）という記号に置き換えることができる。この数字を利用して世界の理解仕方によって、自然科学は発展してきた。

しかし、自然科学の莫大な成果は、我々のものの見方を偏ったものにしてきた。それは、あらゆる認識を数量的に把握することによって理解できるという確信に基づいた世界観である。このような学問的営為によって、従来のフィールド研究でも「量」的な研究がおこなわれてきた。しかし、このような研究だけでは、世界（社会）を言葉によって理解している我々の実感を排除したり、限定したりするものであった。

そこで、質的研究とは、「質」による出来事の理解を試みる。質とは、「目で見える」、「耳で聞く」、「舌で味わう」などの知覚に基づいた理解のことである。例えば、質的データとして目の前のケー

キの理解の仕方は「お母さんがおやつに買ってくれた私の大好きなチーズケーキを食べて（甘い）、おいしいと感じる」という具合である。一方、数量的な仕方では、「成分分析機によってケーキの糖分やたんぱく質の量を計測して糖分の量によってこのケーキが『甘い』という『予測』を立てる」という理解の方法である。

質的研究では、質的なデータを収集するが、決して量的なデータを蔑ろにする立場に立っているのではない。質的なデータは量的なデータによってさらに理解を深めることが出来る。両者は人間の理解の仕方の特徴であって、どちらか一方が正しい認識の仕方なのではないのである。

質的調査者は、質的データ収集の技術を高めることも重要であるが、数量的なデータを援用しながら、出来事（事象）の全体像に迫っていく多面的なアプローチの姿勢が必要なのである。

### 3. 参与観察について

質的研究における観察は、知覚によるデータ収集が求められており、単に第三者的立場からみるだけでは有効なデータを収集することはできない。したがって、調査者は研究対象となる現場への参入が必要不可欠となる。ここに調査者の立場や個性などもデータの対象となる。なぜなら、調査者は何らかの形で現場に参加するのであり、現場の人々の集団の中での地位（役割）が同時に発生するからである。つまり、調査者も現場の出来事を支える一員として振舞わなければならない。

ここで重要なことは、どのように研究対象となる現場に参加するかということである。調査者が現場の集団に溶けこみやすい個性（パーソナリティ）をもっているならば調査者と被調査者との間には「同質性」があると言える。逆に著しく異なる場合は「異質性」があるとなる。ゴートン（1958）は調査者と被調査者の関係を次の四つに類型化している<sup>1)</sup>。

- ①「完全なる参加者」⇒現場の集団の一員としての立場や役割をもって参与している。しかし、集団の不利益になるような内部情報に対してすべてを研究データとすることには倫理的な問題が付随することになる。
- ②「観察者としての参加者」⇒調査者は外部の人間として受け止められているが集団にとって承認されて観察活動を行うことが出来る。
- ③「参加者としての観察者」⇒調査者は、外部の人間であるが、集団の事柄に参加することを認められている。しかし、調査者は、情報収集者としての立場を固辞している。
- ④「完全なる観察者」⇒調査者は、集団から情報収集していることを隠している。被調査者は観察されていることを知らない。

さらに調査者がなにを観察すべきかについて学校現場を事例に挙げてメリアム（2004）は以下の六つの項目に分けている<sup>2)</sup>。

- (1) 物理的環境⇒物理的環境とは何か？どんな状況なのか？その場で求められている行動はどのようなものか？空間配置はどうであるか？その場には、どんな物、資源、技術があるのか？校長室、スクールバス、カフェテリア、教室では、そこで期待される行動とともに物理的要件が異なっている。
- (2) 調査参加者⇒その場にだれがいるのか、その人数と各人の役割を記述すること。彼らが一緒にいる理由は何か？ここにいることを認められているのはだれか？ここにいるべきだが、実際にいないのはだれか？調査参加者の基本的特性は何か？



- (3) 活動と相互作用⇒何が起きているのか？説明可能な活動の流れは存在するのか？人びとは、どのようにして活動の取り組み、相互にやりとりをしているのか？人びとと活動は、どのように「結びつき、相互関連しあっているのか（関係者の視点からみて、あるいは調査者の視点からみて）？」（Goetz & LeCompte, 1984）。活動や相互作用をまとめあげている規範やルールは何か？その活動はいつから始まったのか、そして、それはいつまで続くのか？それは、典型的な活動なのか、それとも非日常的なものなのか？
- (4) 会話⇒この場での会話の内容はどういったものなのか？だれがだれに話しかけているのか？だれが聞いているのか？会話を、直接引用すること、言い換えること、要約すること。可能ならば、ノートをとることの補助としてテープレコーダーを使うこと。交流に意味を付与するような沈黙や非言語的行動は、記録すること。
- (5) 微妙な要因⇒あまり明確ではないが、観察にとって重要だと思われるものは、
- ・インフォーマルで計画されていなかった活動。
  - ・ことばの象徴的・暗示的な意味合い。
  - ・服装や物理的距離などの非言語コミュニケーション。
  - ・小さな身体的特徴のような目立たないポイント。
  - ・「起こらなかったことがら」—とくに、それが起こるはずのことだった場合（Patton,1990,p.235 強調は原文）。
- (6) 自分自身の行動⇒観察者もまた、調査参加者同様、場面の一部である。あなたの役割はどのようなものか？観察場面に対して、観察者として、それとも親密な参加者として、影響をおよぼしているのか？あなたは、何をいい、何をするのか？さらにまた、起きていることに対してどのような考えを抱いているのか？これらは、フィールド・ノートの重要な部分である「観察者のコメント」となる。

質的調査法においては、特に (3) や (5)、(6) などの視点や立場が特徴的だといえる。このような視点に基づいて観察記録をつけていくことによって、事象の「分厚い記述」<sup>3)</sup>が蓄積される。

#### 4. インタビューについて

インタビューは、研究対象となる現場の人々の感情や出来事の解釈の仕方、世界観等また、再現不可能な過去の出来事など外面から観察するだけではわからない事柄について調査するための方法である。したがって、データ収集としてインタビューを用いるかどうかは、必要な情報の種類と、その情報を得る最善の方法であるかどうかで決まるのである。

##### 4.1 インタビューの三つの形式

インタビューの形式は、質問者の問い方によって決まる。質問者の意図がはっきりとしているとき、例えば、質問用紙をもちいたインタビューである場合には、質問が構造化（固定化）されたものと考えることが出来る。よって、質問の仕方が緩やかになればなるほど、質問の形式は軟化していく（図1参照）。

質問が固定化された形式を「構造化」と呼ぶと、次に構造化より緩やかな質問を設定した「半構造化」という段階があり、さらに自由度の高い談話やオープンエンドの質問は「非構造化インタビュー」と呼ばれる。このようなインタビューの手法は、研究者がどのような種類の情報を必要としているかによって決まってくるが、自由度の高い「非構造化インタビュー」は、単なる談話で終わってしまわないようにインタビューを導かなければならないし、ささいな言葉の中に重要な意

構造化インタビュー	半構造化インタビュー	非構造化インタビュー
《高度な構造化》 ・ 質問の内容や順番は事前に決められている。 ・ 一問一答形式（質問者は決められた質問をし回答者は質問に対して答える）。	《緩やかな構造化》 ・ ある程度構造化された質問とゆるやかに構造化された質問を混合させたもの。	《低度な構造化》 ・ 回答者の自由な発言が認められる。 ・ 質問者は事前の質問に左右されることなく回答者の話を聞く。

図1 インタビューの構造化の三段階

味を含んだものを見逃さないように注意しなければならないので、インタビューの経験を積み重ねればうまくいかないことが多い<sup>4)</sup>。

#### 4.2 ワーディング

どのような質問をするかを検討することはインタビュー調査を実施する時には重要な作業である。このような取り組みを「ワーディング」という。よい質問として以下の四つの質問をあげておく<sup>5)</sup>。

- (1) 仮説的な質問⇒ある特定の状況を設定して、それがどのような状況なのか、その状況では何をするのかといったことを回答者に推測させるような質問。
- (2) 反対質問的あるいは反対の立場からの質問⇒回答者が問題に対して、たまたま敏感になっている場合に、回答者を当惑させたり反感を持たせたりするのを避けることに繋がる質問。
- (3) 理想的な立場からの質問⇒これは情報と意見を引き出す。例えば、この授業の良い点と悪い点について述べてください、など。
- (4) 解釈的質問⇒さらなる情報や意見、感情を明らかにするだけでなく、質問者自身の理解をチェックする機会を提供する。この質問は、調査者にインタビュー内容の暫定的な解釈を確認させるものでもある。

#### 4.3 インタビュー開始の手続き

インタビューで最初に表明すべき5つの項目を挙げると以下のようなになる<sup>6)</sup>。

- (1) 調査者の動機と意図、そして調査の目的。
- (2) 仮名を用いることによる回答者のプライバシーの保護。
- (3) 研究内容に対する最終決定権をもつものの決定（責任者）。
- (4) 報酬（必要であれば）。
- (5) 予定されているインタビューの時間、場所、改修に関する実施計画。

インタビュー時における調査者の立場は、「中立性」と「ラポール」の二つに区分している。ラポールはインタビューされている人に対する態度であり、中立性はインタビューの言った内容に対して中立的な視点・立場のことである。

#### 4.4 インタビュアーとインタビュイーの相互的關係

インタビュアー（質問者）とインタビュイー（回答者）の相互作用は、どちらの視点からでも、あるいは相互作用そのものからでもながめることができる。熟練したインタビュアーは効果的な相互作用をもたらそうといろいろなことをする。①回答者に敬意をはらうこと。②独善的にならないこと。③脅威をあたえないこと、などが最初の一步である<sup>7)</sup>。

#### 4.5 インタビュー・データの記録方法

インタビュー・データの記録の仕方は3点ある<sup>8)</sup>。

##### (1) 録音機器による記録

長所⇒話の内容の一切を記録することが出来る。

短所⇒機械の故障や回答者に与える威圧感など。

##### (2) ノートをとる

長所⇒調査者が重要だと思われる箇所を記録し、注釈やその時の感想を加えられる。

短所⇒すべてのインタビュー・データを記録することができない。

##### (3) インタビュー後の記録

長所⇒調査者が記録をとることによって回答者が不快や緊張などを感じる場合などに威圧感を和らげる。

短所⇒データの信憑性に欠ける。

#### 5. 質的調査者と質的データの関係性—データ分析に向けて—

参与観察とインタビューによって、研究対象となる現場を多面的に把握する視点を「トライアングレーション」または「マルチメソッド」と呼ぶ<sup>9)</sup>。

参与観察とインタビューによって収集したデータは、記録する際にすでに加工されている。そのため、質的データは随意的であるという批判は免れないだろう。しかし、質的研究は、当初の調査者の問題意識とは違った事実が浮かび上がることがあっても、データを操作して研究者の問題意識を作り上げることは禁じられている。確かに、調査者の問題意識は研究の動機となっているが、調査を進める過程で、これまで知られることがなかった情報や新たな発見などによって、当初の問題意識とは、違った事実を突きつけられる。ここで、質的調査者はデータを自身の研究課題に合わせて加工するのではなく、明らかになった事実に基づいて自身の研究課題を改変していく作業が必要になってくる。これを「リサーチ・クエスション」<sup>10)</sup>という。

以上のような視点や立場から質的データは、「トランスクリプト」（文字の書き起こし）によって、データの検討や客観化が図られる。文字の書き起こしは、時系列に発話を簡略してまとめて記述する方法が一般的である。しかし、エスノメソドロロジーなどの会話分析の手法では、「発話の抑揚」（会話の調子）や「問の取り方」（沈黙など）、「言い淀み」等、記号を使用して表現・記述する方法もある。このような細かい分析によって、発話の表面上の意味を理解するだけでなく、アイロニー（皮肉）やノリ（気分）などの発話者（または会話状況）の多重的な意味の表出を理解することも目指しているのである<sup>11)</sup>。

（岡田 啓佑）

### 第三章 ライフストーリー研究

#### 1. ライフストーリー研究の概念

人間が自身の人生をある出来事として語ることを見出そうとすることがライフストーリー研究である。ライフは「人生」や「生涯」、「生き様」など多様な意味を持っている。よって、人生のどの出来事を対象とするかによって、研究の具体性が決定されてくる。

このような考え方によれば単に人の誕生から死までの間を扱うだけでなく、世代間で語り継がれているような内容も含まれる。一方、「受験」や「就職」、「結婚」などのイベントや個人的な「喧嘩」や「旅行」などの短いエピソードも研究対象になるのである。

#### 2. ライフストーリー研究の特徴

やまだようこ(2007)によれば「ライフストーリー研究(人生物語)は、ライフヒストリー(生活史)、オーラルヒストリー(口述史)、ライフレビュー(人生回想)などの研究と類似しており、一部は重なっている<sup>1)</sup>」と述べているように、一概にライフストーリーと他の先行するライフ研究を包括することはできない。

谷富夫(1996)はライフ・ヒストリーの共通理解を以下の10項目挙げている<sup>2)</sup>。

- (1) ライフ・ヒストリー法は、個人の生活構造(あるいは生活世界)に焦点をあてる。
- (2) ライフ・ヒストリー法は、異文化を対象とし、それを人間行動の動機に遡って内面から理解しようとするとき、より効果を発揮する。
- (3) ライフ・ヒストリー法は、人生の一時期、あるいは一生、さらには世代を超えた生きざまをも対象とし、そこで展開される生活構造の変遷や、世代間の文化継承・断絶などを長いタイム・スパンで探求する。
- (4) ライフ・ヒストリー法は、個人のみならず、マクロな組織、制度、システムも視野に入れ、個人史と社会史、主観的世界と客観的世界、これらの連動関係を把握しようとする。
- (5) データとしてのライフ・ヒストリーには代表性や客観性が欠けるとの批判があるけれども、個別を通して普遍にいたることは可能であり、個性的記述の蓄積を通して類型構成への道が開かれている。
- (6) ライフ・ヒストリーなどの質的データと量的=統計的データとの相互補完によって、より豊かな研究成果を生み出すことができる。
- (7) ライフ・ヒストリー調査の成否は、調査対象者とのラポール(信頼関係)にかかる部分が大きい。
- (8) ライフ・ヒストリー調査では、調査者と調査対象者との長時間にわたる双方向的なコミュニケーションがおこなわれるので、そこでは調査対象者が自らの語りで自らを癒し(カタルシス)、自らの生の意味づけを再確認する(自己反省)、といった事態が生じうる。同時に、調査者自身の自己反省の機会ともなりうる。
- (9) ライフ・ヒストリー調査は、マイノリティ・グループの声をすくい上げられる。
- (10) ライフ・ヒストリー調査によって得られた結果の公表にあたっては、プライバシーが侵害されることのないよう、調査対象者を匿名・仮名で表すなど、倫理的観点からの慎重さが要求される。

以上の10項目のうち質的研究の手法として(1)～(6)が質的調査法として(7)～(10)が当てはま

る。ライフストーリー研究との大きな違いは(7)に近い特徴を持つが、さらに(8)の自己反省とは別に調査者が調査対象者の「語り」を「再構成」するところにある。つまり、調査対象者が語っていた時間では、気がつかなかった出来事の語りを多面的に語り直し、「新たな出来事の意味の再発見」を目指すという「物語論的研究」が導入されるのである。

### 3. 物語論とは

物語論の系譜はアリストテレスの「ミメシス」の概念に遡ることが出来るが、現代の物語論は、実在論や認識論など哲学の主要な問題と関わり、科学哲学、歴史哲学、言語哲学と結びつきながら、ナラティブ研究の理論的骨格を形成した<sup>3)</sup>。

本章で取り上げる物語論は、P・リクール(1990-1985)やメルロ・ポンティ(1908-1961)などの現象学的な手法における「自己の語り」を物語として構成する立場に拠っている。

前者のリクールは、物語と時間の関係を考察し、物語構成の仕方である「筋立て」(語られる出来事や行為の選定と配置)の構造的調和を強調した。調和とは「完結性」、「全体性(初めと中間と終わりをもつこと)」、「適度な大きさ」の三つによって性格づけられる。リクールの物語の特徴は、アリストテレスの「はじめ」→「なかば」→「終わり」をもつものが一つの全体を形成するという悲劇論を基礎にしている。また、実体としての自己アイデンティティではなく、物語論的に組織される「物語的自我論(アイデンティティ)」という概念を提出した<sup>4)</sup>。

後者のメルロ・ポンティは、ソシュールの影響を受け、構造としての言語体系に着目し、言語行為に還元された言語と表現、意味と意味されるものとの同一性を打ち出した<sup>5)</sup>。これは、「言語活動とは、主体がその意味の世界のなかでとる位置のとり方」<sup>6)</sup>と述べているようにメルロ・ポンティは語る主体を取り巻く意味論的構造を明らかにしようとした。

### 4. 半構造化インタビュー

ライフストーリー・インタビューでは、構造化インタビューより自由度の高い「半構造化インタビュー」を用いることが適切である。なぜなら、構造化された質問や面接の流れは、インタビュアーの意図が大きく反映され、インタビュイーの自由度を制約するからである。

一方、半構造化インタビューは、インタビュイーの自由な発言が尊重され、インタビュアーは大まかな話の流れや確認などに気をつけるのみである。このようなインタビュアーの語りは、出来事の主観的な感情や動機などが意識的、無意識的に関わらず、含んでいると考えられる。

### 5. 語りの再構成の必要性—事象の多面的アプローチ—

インタビューによって語られた出来事は、現実の事実に基づいている。現実の出来事は一回性で二度と経験することのないものである。このような現実の出来事を「ことば」は再構成する機能を有している。現実とことばの関係は、意味の関係である。事実は意味に置き換えられて我々が理解可能なものになる。

出来事をことばによって再構成することの意味は、人間が出来事の意味を多様に語りうるという事実にある。ある出来事は、様々な視点(解釈)によって多様に語られる。

したがって、物語論的研究とは、出来事を多面的な視点によって語り、多層的な理解によって出来事を理解していこうとするものである<sup>7)</sup>。

### 6. 語りの再構成の教育的意義—自己成長の物語—

人生の中で大きな転機となるイベントは、すべての人々が少なからず経験するであろう。その中

である事態や状況によって、人間成長が促されることは教育の可能性という視点から重視されるべきことである。出来事の教育的意義、ここでは「自己成長」というように言いたいと思う<sup>8)</sup>。

例えば、アメリカでの留学体験をした留学生の語りの中には、困難に直面して「ひどい目にあった」というような悲壮感が話されたりするが、目の前の困難をどうにかして乗り越えようとする過程を踏んでいるならば、困難の結果に関わらずこの出来事が「人間成長」として大きな要因となっていることが語りの再構成作業から浮き彫りになってくるだろう。

ある出来事が単に悲劇や苦悩、苦痛を伴うものであった場合、心理的には避けたい経験となる。そしてこの語りは、悲劇や苦悩として語られる。しかし、出来事の持つもう一つの意味は、悲劇や苦悩の体験が自己拡大の契機となることである。出来事を乗り越えようとする個人の努力は、困難な事態であればあるほど時間や準備がかかるし、他者の助けも必要になるかもしれない。

よって、ライフストーリー研究におけるストーリーの再構成の教育的意義は、自身では気付かない出来事の意味を別の視点から眺めることによって出来事の新たな側面が開かれることによって人間成長にとっての出来事のもう一つの意味を捉え直すことにある。

## 7. 中国人留学生の留學生活支援の可能性についてのアクションリサーチ

筆者(高宁)の修士論文のテーマは「留学体験に伴う二重の困難性」である。これは、香川大学に來た中国人留学生のインタビューから、留学体験での苦しかったり、悲しかったりした出来事が語られた。しかし、一方で、この困難な出来事はこれを乗り越えようとする努力を引き出し、結果的には、「人間成長」の要因の一つとしてみる事ができるものであった。

筆者は、この出来事の二つの意味に着目して、中国人留学生の留学体験をみつめ、人間成長を促す「小さな困難」と留学生の個人的努力では乗り越えられない社会的課題解決が必要な「大きな困難」に峻別するとともに、小さな困難に対する個人的な支援と大きな困難に対する社会的課題への提言を含めた「課題解決型実践的研究」(アクションリサーチ)を試みている。

個人的な支援として、「チューター」という立場からどのような支援が必要であり、可能なのかについて、実践的な取り組みを行っている(ほとんどは言葉や生活習慣、進路など)。大きな困難における問題解決への取り組みは、主なものとしては、「セクハラ」や「履修科目」の自由選択や変更などについてである。大きな困難では、大学の留学生支援部局との連携が非常に重要となっている。

留学生と筆者の人間関係は、同じ中国人留学生の先輩と後輩ということで、かなり親密な関係を築くことが出来た(同質性)。親密になればなるほど、彼らの抱える問題を共有し、一緒に解決していこうと考えるようになった。

したがって、フィールドワークの実践的研究では、現場の人々との人間関係の「親密度」が重要な要素であると言えるだろう。

(高 宁)

## 第四章 エスノメソドロロジーの基礎理論

### 1. エスノメソドロロジーとは

エスノメソドロロジーの創唱者であるガーフィンケルは、「エスノメソドロロジー」の命名について、『「エスノ」という言葉は、ある社会のメンバーが、彼の属する社会の常識的知識を、『あらゆること』についての常識的知識として、なんらかの仕方で行うことができるということ指すらしい』<sup>1)</sup>

という使い方を従来のエスノボタニー（民族植物）やエスノフィジオロジー（民族生理学）などから参考にしたことを語っている。つまり、エスノメソドロロジーとは「社会のメンバーがもつ、日常的な出来事やメンバー自身の組織的な企図をめぐる知識体系」<sup>2)</sup>を扱う研究であり、「そのような知識が状況に秩序を付与し、また当の状況の一部にもなっているとみなす」<sup>3)</sup>視点に立つ。これは「観察でき、しかも報告できる (observable-reportable)」<sup>4)</sup>ということが研究の手法と結びついている。

様々な推論と方法論的研究によってエスノメソドロロジーが規定されようとしているが、当のガーフィンケルは、そのような取り組み自体が大切であり、世界を固定的にみるのではなく、流動的にみる視点の立場や方法が大いに議論され、実践されていくことが重要であるとする<sup>5)</sup>。

## 2. 流動的世界像への視線転換—現象学の導入—

ガーフィンケルは、エスノメソドロロジーの理論的部分より実践的部分を重要視し、出来事の「博物誌」的なフィールド研究がエスノメソドロロジーと呼ばれうると考えている<sup>6)</sup>。しかし、固定的世界観から流動的世界観への転換を要求するエスノメソドロロジーには調査者に対する具体的な視点変更の手続きが必要になるだろう。ここにエスノメソドロロジーの基礎理論としての「現象学」が要求されてくる。

ガーフィンケルは、タルコット・パーソンズに師事し、『他者の知覚』という博士論文で学位を取得している。この論文では、ホップス問題（「社会秩序はどのようにして可能なのか」）を取り上げ、パーソンズの機能主義に対してアルフレッド・シュッツの「現象学的社会学」の立場から反駁している<sup>7)</sup>。

エスノメソドロロジーの創唱者であるガーフィンケルの博士論文で現象学的手法が用いられたからといってエスノメソドロロジーの基礎理論が現象学であると規定することはできない。上述の検証にガーフィンケルは実験社会心理学的な手法を用いているし（背知実験）、言語哲学や解釈学的手法が「会話分析」に取り入れられている。

しかしながら、エスノメソドロロジーが社会学の分野におけるフィールド研究というガーフィンケルの位置づけに従うと、社会調査者が現象学的な視点によって研究対象にアプローチすることが重要になってくるのである。もちろん、現象学的な視点を経験から導き出す研究者もいるかもしれないが、エスノメソドロロジーが学問である以上、学問的な営みによって固定的世界観から流動的世界観への転換がおこなわれるべきであるだろう。

したがって、現象学の始祖フッサールが二元論的世界観から方法論的一元論的世界観に視線変更するための具体的な意識作用の操作を提起していることを考えると、現象学的態度変更がエスノメソドロロジーの学問的な営為として無視することは出来ないだろう<sup>8)</sup>。次項は現象学に関する主要な概念について簡単に説明していきたいと思う。

## 3. 現象学について

### 3.1 現象学の哲学的位置

現象学の哲学的位置づけは主知主義と言われている<sup>9)</sup>。主知主義としての現象学は認識の成立する条件としての明証性を確定し、そこからあらゆるものを基礎付けていこうとするものである。デカルトが行った懐疑的態度は「疑えるもの」と「疑えないもの」を区別し、絶対に疑えないものを探し出すという手続きであった。そして懐疑に耐えうる確実なものは、このように懐疑を行う自分自身である、という結論に到達する。

例えば、目の前にあるりんごが本当にりんごであるかは知ることができない。なぜなら、本物そっくりりんごを加工した偽物かもしれないという疑いは決して拭えないからである。しかし、

あらゆるものを疑っている自分の存在が偽物だったり、幻だったりしても自身にとってはどうでもよいことで、そのように、考えたり、疑ったりすること自体は疑っても仕方が無いだろう。

よって、考えたり、疑ったりする自分だけは確実なものである。フッサールはこのデカルト的明証性をさらに厳密に純化する方法を徹底的に突詰める。いわゆる、明証性を持つ意識からあらゆる認識を基礎付けていこうとするのである。

### 3.2 絶対的明証性

純粋な意識経験が明証性を持つという意見は説得力があるように思えるが、哲学的にはそう簡単に済まない。なぜなら、「主観と客観の問題」をどのように解決するかということが非常に重要な問題であるからである。単純に主観が明証性を持つとしても、一方の客観はどのように保証されるのか、という問題が生じてくる。

フッサールはこの問題に頭を悩ます。『論理学研究』の時期には、意識作用に重点が拠っていたが、P・ナトルプの批評によって、主観的なものと客観的なものの区別をはっきりさせる必要を自覚する<sup>10)</sup>。

ところで、主観—客観の問題を簡潔に説明しておく。哲学の発生以前は、世界説明の方法が「神話」によるものだったが、誰もその真相を確かめることができず、確かめることのできない、もの(神話)を信じることには限界があった。そこで、登場するのが、経験的事実や論理的思考によって、世界を説明することである。そして、この世界を説明する立場が主観から客観を説明するという二元論であった。

二元論とは、主観と客観が同時に存在していると看做す考え方である。しかし、二元論は、論理的に絶対的根拠に到達することができず、例えば、カントでは「物自体」という客観的なものの実体を想定しなければならなくなる。一方の一元論では、主観的立場では「独我的」になる<sup>11)</sup>。

そこで、フッサールは人間に与えられた明証性は意識内にしか見出せないと考え、方法論的に主観的立場をとる。問題の要点は、主観的立場からどのように客観的なものの存在を認識(信憑)しているのか、ということをはっきりとすることである。

まとめてみると、我々が普段気にせずには他者や社会や目の前の事物に接しているが、この認識の確実性を吟味してみると、あらゆるものが確実性を失う。その中で確実にあるといえるものが疑いを遂行している自分である。ただし、フッサールはこれを実体とは言わず、「絶対的明証性」(超越論的主観性)という。デカルトはこれを実体としたために二元論のパラドックスに陥ったと述べている。またフッサールの採った態度は「理性批判」と呼ばれる。よって、フッサールは単純に主観的立場に立ったのではなく、明証性という事実性によって自我的な思索や創造などの随意性を排除したのである。そのためには、「方法論的に主観的領域を研究対象」としなければならない。このようなことがわかれば、意識の純粋性と認識の明証性が相対的であることが言える。フッサールが意識の純粋性にこだわったのは、明証性を確認するためであった<sup>12)</sup>。

### 3.3 記述的方法

心理学における記述的方法を提唱したのは、フッサールの師ブレンターノ(Franz Brentano 1838~1917)である。ブレンターノによると、知覚には「十全的」と「不十全的」な明証性を持つものがあるという。十全的とは、知覚されたものがそれ以上与えられることなく、隅々まで提示されているもの、完全な対象の与えられ方。不十全的とは、与えられた対象が一面的で、それを完全に捉えるのに不十分な与えられ方をするもの。このように明証性を基準に知覚を分類すると、「十全な知覚」と「不十全な知覚」に分けられる。さらに、前者は内的知覚で後者は外的知覚であるとされる。



内的知覚は常に十全的な与えられ方をするため、明証性を保証するのに対し、外的知覚は不十全にしか与えられない。また、内的知覚は与えられたものを分析するだけであるが、外的知覚は、対象の一面的な部分を総合して考えることができる<sup>13)</sup>。よって、認識論的には、内的知覚が分析的認識であり、外的知覚が総合的認識に相当されるであろう。

ここで言う記述的方法とは、十全的な明証性をもつ内的知覚における分析の記述である。フッサールはブレンターノから受け継いだ記述的方法を本質記述として捉え直し、ブレンターノではあいまいだった主観的なものと客観的なものの区別をノエシス（主観的作用）とノエマ（客観的意味）に峻別することに成功（現象学的還元）する。このような視点では、十全的、不十全的知覚は問題にならず、対象の与えられ方そのものを観て取る方法にまで進めたのである<sup>14)</sup>。

### 3.4 現象学的還元

この意識の純粹性をどのように獲得するか、という課題の克服によって現象学が生まれたといわれてよい。フッサールは、我々の素朴な自然的態度、日常生活を営む意識において、認識される対象はすべて「手前にある」という存在性格を持つ。これを「一般的定立」と呼ぶが、これはすでに高次の意識作用であり、その内に含まれる意識されていない意識作用は秘匿されたままである。したがって、自然的態度では、この隠された意識を捉えることはできない。そこで、一般的定立を「括弧に入れ」これを「遮断」する。ここで重要なことは、「括弧入れ」や「遮断」によって、「一般定立」を排除ないし反定立するような仕方、変換することではない。ただ、一般定立の（意識の）働きを保存したまま働かなくするだけである。これをフッサールは古懐疑主義の創始者であるピュロン（pyrrhon, BC365年頃～275年頃）の判断中止（エポケー）という語を借用して、「現象学的エポケー」と呼称している<sup>15)</sup>。

現象学的エポケーによって、日常生活の意識（自然的態度）は「括弧に入れられ」一般定立が作用の外に置かれると、一般定立を基づけている「事象そのもの」（現出）の領域が開かれる。これを「純粹意識」（または超越論的主観性）の領野と呼ぶ。現象学は認識の対象をこの領野に遡及することによって、「事象そのもの」という根源事実性を獲得する。ちなみに、純粹意識とは、純化された意識などではなく、あらゆる認識対象が現出してくる領野という意味であり、人格的自我や意識作用とは手前の次元に属する。よって、純粹意識それ自体が現出することはありえず、認識の外に置かれる「匿名的」なものである。したがって、純粹意識と呼ばれるものが、意識や人格的自我と同等と捉えては成らない<sup>16)</sup>。

### 4. 質的調査者における現象学の援用

ある出来事を研究対象として枠付けることによって事例研究がはじまる。質的調査者は、この事象の中に参与して自らも事象の構造に関わっていくことになる。この時、事象を成り立たせている様々なつながりを意味の連関として「観察」―「記述」していかなければならない。事象を徹底して意味構造（意味の網の目）として観察、記述していく営みは現象学的研究といえよう。

しかし、質的調査者は現象学者ではないし、現象学的に意識作用を操作して現象学的還元による態度変更をおこない、現象学的な問題意識によって現場を記述していくことは望ましいことではない。なぜなら、現象学が要求する厳密性を満たすには膨大な記述が必要であるが、質的調査における問題意識は、現象学的な厳密性を要求していないからである。つまり、質的研究において目指されていることは、事象の真実的な認識的判断（ありのままの現出を把握）ではなく、現場（事象）の中に居る人々の課題を手助けすることにあるのである（課題解決）。しかしながら、人々の課題が、自明な事柄に注目することによって状況の新たな構築の発見にあるのならば、現象学的な研究

課題と重なってくる。ここに、現象学と社会学の共通項が見出される。

現在の質的研究では、エスノメソドロジーをはじめ研究手法の中に現象学的な視点が織り込まれている。よって、質的調査者は無自覚的に現象学的な視点をゆるやかな形で有していると考えられる。これがフィールド研究の経験を重ねることによって、経験的もしくは学問的に深められる可能性を持つ。質的調査者の反省作業の深まりは厳密な学問的手法として現象学を要求するのである<sup>17)</sup>。

そして、現象学的手法の導入は学問的手続きによる徹底した世界観の視線変更を可能にする。質的調査者にとっての現象学の意義は、現場を意味の連関構造として把握する視点を確保する手法として用いることである。実践的研究を志向するエスノメソドロジーは必ずしも現象学的な問題意識と重ならないが、その手法によってより具体的で確実な視線変更が可能になることは質的研究にとって重要な方法論となってくるのである。

(崎浜 聡)

おわりに—結びにかえて—

本論の各章では、最近の質的研究の基礎理解や基本的な研究手法について述べられてきたが、各章で共通する事柄は従来の質とは異なった「質」の新しい理解の仕方がなされていたように感じられた。

第一章で取り上げた質的調査の碩学である中野卓は、現場への参入の仕方の重要性について説いているが、まだ、質的なデータ収集に留まっており、研究者の存在は、あくまでも現場の人々の代弁者であった。しかし、第二章の第一項で現在の質的研究では「課題解決型実践的研究」(アクションリサーチ)が目指されていることを挙げており、さらに、第三章ではライフストーリーとして語った話者のストーリーを教育学的な視点から再構成し、体験の多様な意義(困難の中にある人間成長)を見出し、留学生生活の支援をおこなう実践的な研究の試みが提起された。第四章では、現場(フィールド)を「意味の網の目」として意味論的に構造化する「まなざし」によって、状況理解を外部の視点からではなく、内部の意味生成の場から理解したり、参与したりするエスノメソドロジーについて、現象学的手法を援用することによってそのまなざしの修得が促されることが指摘された。

つまり、従来の質の概念は、視覚や聴覚などの知覚的なデータの記述と定義されていたが、最近の質の概念は、研究対象である現場(フィールド)そのものを徹底的に知覚データ化するのである。これには、二つの手法がある。一つは、素朴な知覚データを意味論的に再構成し直す場合(物語論)と、もう一つは、調査者自身が状況に意味論的まなざしや態度によって身を置き、記述する方法である(質的調査者)。いわゆる、フィールドワークの意味論的転換によって、我々の実体的な世界感覚から、実存論的な世界内存在へと変更しようとするものである。

このような転換は、社会的価値形成のプロセスが他者との相互的なやりとりの中から生じる意味の構造物であるという現象的事実から導出された論理に基づいている(象徴的相互作用論)。よって、最新の質的研究のまなざしが、エスノメソドロジーに基づいて展開しており、さらにその基盤として現象学が大きな影響を与えている事実を見逃してはならない。

しかしながら、最新の質的研究がどのように理論的整備が進められようとも、フィールド研究である以上は、調査者の「体験」という次元を忘却してはならない。瀬戸内海の島々を調査した宮本常一(1901-1981)は、昼間は人々から話を聞き、夜に聞いた話を思い出してノートにまとめている

た。学問的な信頼性からいうとこのようなデータの記述は、妥当性にかけると言わざるを得ないだろう。しかし、宮本は単に視覚的に見たままを記録するのではなく、その状況を反省的に捉え直して、自身の体験全体とつなげて記述（表現）することをおこなっていたのである。この出来事を自分とどのようにつながっているのか、という視点から理解していく方法は、まさにエスノメソドロジーの思考と重なるものである。

しかし、宮本がエスノメソドロジーに近いことを実践していたことは、驚きに値しない。なぜなら、現場を理解するのに現場の内から見出ししていこうとする志向は、目の前の出来事を理解するごく自然な仕方であるからである。

我々は、学問の客観性にこだわるあまりに主観的なものの多くを排除してきてしまった。この過程で、「状況に即した理解の仕方」や状況を打破しようとする「実践的な意欲」を失ってしまったのではないだろうか。

したがって、若い研究者達が最新の研究法を使用して、フィールドワークをおこなうことは旧来の卓越したフィールドワーカーの問題意識に近いものであることを忘れてはならない。しかし、現場の課題を当事者の一員として解決を目指すアクションリサーチのような実践的研究は編著者も含め、年配の研究者よりも若い世代の研究者の方に適性があると考えられる。

年配の研究者達を教えた先生方は、旧来の民俗学や文化人類学的手法を用いたフィールドワークを開拓した人々であった。その手法を引き継いだ編著者らの世代は、フィールドワークでは、実態把握を主な調査の対象とし、実態把握を通じたフィールドの諸課題を浮き彫りにすることが目指されていた。よって、編著者も相変わらず書齋にある『定本柳田國男集』や『宮本常一著作集』などを参照し、民俗学的な聴き取り調査を用いて調査研究をおこなっている。

最新の質的研究の研究姿勢は、現場に「参与」し、当事者の一人として「問題を共有」し、「共同して課題を解決」していく「態度」、すなわち「課題解決型実践的研究」（アクションリサーチ）といわれている。しかし、このようなフィールドワークは調査者（実践者）にとって非常に困難な手法といえるだろう。人生経験も浅い、若い研究者が現場の人々の中に入れてもらい、メンバーの一員として認められることはなかなかできることではないし、メンバーとして同化してしまうと調査者としての役割は務められなくなる。現場での人間関係は信頼感（ラポール）が重要であるが、近づきすぎ（オーバーラポール）ては客観的な決断ができなくなってしまうのである。「課題解決型実践的研究」では、これらの問題を乗り越えて現場の課題解決に向けた実践をおこなわなければならないのである。

以上のような実践的態度は、従来の調査研究を主体とするフィールドワークでは、排除されてきた態度であるが、最新の質的研究ではその態度が非常に重要なのである。一方で、若手の研究者がいきなり、現場での実践的研究ができるとは思われない。なぜなら、これまで述べてきたように、実践的研究は重要であるが、研究者は現場での調査研究の経験を積み重ねながら、現場の人々との交流の仕方や課題の見つけ方、そして、解決に向けての創意工夫などを徐々に身につけていかなければならないからである。もちろん、すべてのフィールドワークが実践的研究である必要はなく、これも研究者の問題意識によって取り組まれる事柄なのである。

このような新たな調査研究の動向を受けて編著者は、若い研究者達が最新の質的研究の諸理論を学び、フィールドワークの経験を重ねていき、新しいタイプのフィールド研究の実践に向けて研鑽していくことを念願する次第である。

（渡邊 安男）

## 参考・引用文献

## 第一章

- 1) 祖父江孝男『文化人類学入門』中央公論社、1979年参照。G・ルクレール(著)宮地一雄・宮地美江子(訳)『人類学と植民地主義』平凡社、1976年参照。
- 2) ラドクリフ＝ブラウン(著)青柳まちこ(訳)『未開社会における構造と機能』新泉社、1981年参照。B・マリノフスキー(著)姫岡勤(訳)『機能理論』岩波書店、1958年、165頁参照。
- 3) 中野卓・小平朱美『老人福祉とライフヒストリー』未来社、1981年、17頁引用。
- 4) 中野卓・小平朱美、上掲書、35頁引用。
- 5) 中野卓・小平朱美、上掲書、37頁引用。
- 6) 中野卓・小平朱美、上掲書、16頁引用。
- 7) 中野卓・小平朱美、上掲書、36頁引用。
- 8) 中野卓・小平朱美、上掲書、42-43頁参照。
- 9) 中野卓(編著)『離島トカラに生きた男・第一部』御茶の水書房、1981年参照。中野卓(編著)『離島トカラに生きた男・第二部』御茶の水書房、1982年参照。
- 10) 河西宏祐『インタビュー調査への招待』世界理想社、2005年参照。
- 11) 宮本常一『民俗学への道』岩崎書店、1955年、231-234頁参照。
- 12) 渡邊安男『瀬戸大橋架橋の島々の住民の生活意識』『瀬戸大橋架橋に伴う地域社会の社会体系・生活体系・文化体系の変容に関する総合的研究』(昭和63年度教育研究特別経費による報告書)、1989年参照。
- 13) 渡邊安男・崎浜聡・渡邊友明『瀬戸大橋の橋脚の島の人々の生活と教育と地域課題』『香川大学教育学部研究報告第130号』2008年、63-74頁参照。

## 第二章

- 1) S・B・メリアム(著)堀薫夫・久保真人・成島未弥(訳)『質的調査法入門—教育における調査法とケース・スタディー』ミネルヴァ書房、2004年、146-148頁。
- 2) S・B・メリアム、上掲書、141-143頁引用。
- 3) 佐藤郁哉『フィールドワークの技法』新曜社、2002年、293-296頁参照。
- 4) S・B・メリアム、前掲書、108頁参照。
- 5) S・B・メリアム、上掲書、112-115頁参照。
- 6) S・B・メリアム、上掲書、122頁引用。
- 7) S・B・メリアム、上掲書、124頁引用。
- 8) S・B・メリアム、上掲書、127-128頁参照。
- 9) N・K・デンジン、Y・S・リンカン(著)平山満義(監訳)岡野一郎、古賀正義(編訳)『質的研究ハンドブック』北大路書房、2006年、6頁参照。
- 10) 佐野正之(著)『はじめてのアクション・リサーチ』大修館書店、2005年参照。
- 11) 北澤毅、古賀正義(編)『質的調査法を学ぶ人のために』世界思想社、2008年、162-164頁参照。

## 第三章

- 1) やまだようこ(編)『質的心理学の方法』新曜社、2007年、129頁引用。
- 2) 谷富夫(編)『はしがき iii-iv』『ライフ・ストーリーを学ぶ人のために』世界思想社、1996年、引用。
- 3) ジョン・ヴァン＝マーン／森川渉『フィールドワークの物語』現代書館、1999年、159-167頁参照。
- 4) ポール・リクール／久米博『時間と物語 I』新曜社、1987年、参照。

- 5)メルロ・ポンティ／竹内・海老坂・滝浦・木田他『シーニュ』（1）みすず書房、1969年、参照。
- 6)メルロ・ポンティ／竹内・小木・木田・宮本『知覚の現象学』（1）みすず書房、1967年、316頁引用。
- 7)毛利猛『臨床教育学への視座』ナカニシヤ出版、2006年、参照。
- 8)矢野智司『自己変容という物語』金子書房、2000年、参照。

#### 第四章

- 1) H・ガーフィンケル(著)山田富秋、好井裕明、山崎敬一(編訳)『エスノメソドロジー—社会学的思考の解体』せりか書房、1987年、14頁引用。
- 2) H・ガーフィンケル、上掲書、17頁中段引用。
- 3) H・ガーフィンケル、上掲書、17頁下段引用。
- 4) H・ガーフィンケル、上掲書、16頁引用。
- 5) H・ガーフィンケル、上掲書、18頁参照。
- 6) H・ガーフィンケル、上掲書、6頁参照。
- 7) H・ガーフィンケル、上掲書、317頁参照。
- 8) 木田元、野家啓一、村田純一、鷺田清一(編)山口節郎(筆)「エスノメソドロジー」『現象学事典』弘文堂、1994年、40-41頁参照。
- 9) 務台理作(筆)「フッセル」『主知主義 唯物主義』河出書房、1938年、35-67頁参照。
- 10) P.Natorp., "E. Husserl Prolegomena zur reinen Logik" in Kantstudien VI, 1901, S270-282. 細谷恒夫(邦訳)『フッセルの純粹現象学考案』(哲学叢書43)岩波書店、1932年。
- 11) 「二元論」については、竹田青嗣(著)「<主観—客観という難問>」『現代思想の冒険』筑摩書房、1992年、167-173頁参照。現象学の方法論独我論については、新田義弘(著)『思想としての20世紀』岩波書店、1993年、7-11頁参照。
- 12) 意識における「不可擬性」とは、デカルトの方法論的懐疑と同じで、両者とも疑えないものを明証性として探究した。その結果デカルトは「コギト」をフッセルは「超越論的主観性」を発見する。この発想は、明証的なものは疑えるものをすべて疑った末に残ったものであるというもの。E・フッセル(著)渡辺二郎(訳)『純粹現象学と現象学的哲学のための諸構想』みすず書房、1979年、209頁参照。
- 13) 「記述的方法」については、H.スピーゲルバーク(著)、小倉貞秀(訳)『ブレンターノの哲学』以文社、1986年参照。
- 14) 「十全的知覚」と「不十全知覚」については、E.フッセル(著)立松弘孝(訳)『論理学研究〔4〕』みすず書房、1976年、254-275頁参照。
- 15) 意識の内に明証性を見出す方法として、まず様々な憶測を働かないようにして意識に与えられるがままの所与に注目するための方法。千田義光『現象学入門』放送大学教育振興会、2000年参考。
- 16) 「純粹意識」(超越論的主観性)の匿名性については、新田義弘(著)「超越論的主観性の匿名性」『現象学とは何か』講談社、1992年、144頁参照。
- 17) K・タイラー(著)高山知子(訳)『エスノメソドロジーとは何か』新曜社、1987年参照。

【付記】本論文の編集作業は渡邊安男を中心に行った。特に院生の崎浜聡君には、編集作業の補助の労をとってもらった。この場を借りて深く感謝の意を述べたいと思う。

## 《執筆順》

渡邊安男(香川大学教育学部 教授)

渡邊友明(香川大学大学院教育学研究科 院生M2)

岡田啓佑(香川大学大学院教育学研究科 院生M2)

高 宁(香川大学大学院教育学研究科 院生M2)

崎浜 聡(香川大学大学院教育学研究科 院生M2)